

うのぜみもまた、ステップスのこの時期の恒例となってきた感がある。宇野和幸（1960-）自らが、教鞭を執る嵯峨美術大学の卒業生と共に開催するグループ展こそ、うのぜみなのだ。今回は宇野を含む三人展となった。

國吉文浩（1987-）は2010年に卒業、京都、大阪で個展、グループ展と旺盛に活動している。具象絵画ではあるのだが、自らが取り巻く世界と絵画が取り囲む環境という二つを「仮説」として捉えている点が、非常に現代的な概念性を追求していることになる（中）。

徳岡真帆（1992-）は2015年に卒業、京都で個展を展開している。今回は小さな作品を組み合わせて、インスタレーション的な展開を見せた。家の中で首を括る者。死ではなく、世界の転換が起こる。そんなことを知ることもなく、世界は静かに活動する（下）。

宇野の作品もまた、大きく展開している。風景としてのあり方は、海か空か。グリッドが形成するのは自然か人工物か。それは、我々が嘗て使っていたのか、これからみる光景なのか。様々に考えが生まれるのは、我々を覆いつくす雲のような形状だからか（上）。

各人、質の高い小品を事務所に展示した。写真を掲載できずに残念だが、このサイズであれば手にすることができるであろうという誘惑が心地よい。美術作品を見る環境は自宅が絶対的に良い。好きな時に見て、好きなことを考えればいいのだ。

三者が世界に対して問いかけているのは、「確信的な仮説が蓄積されていく。そういった証明され得ない仮説の蓄積と交錯が、世界を実感として構築している。曖昧さとして捉えられるべきものではないそれを解き明かすべく、私達はさらに仮説を持って臨む」（リーフ）ことである。確信された仮説の論証とは、展覧会以外の何者でもない。ここに現れているのは空想や幻想ではなく、明らかにいま、私達が垣間見ている現実なのである。

